

信仰心の世代間連鎖の背景

松下年子 (横浜市立大学医学部看護学科) / 河口朝子 (長崎県立大学看護栄養学部看護学科) / 原田美智 (元九州看護福祉大学看護福祉学部助産学専攻科) / 片山典子 (湘南医療大学保健医療学部看護学科) / 田辺有理子 (横浜市立大学医学部看護学科) / 塩月玲奈 (医療法人静和会中山病院看護部)

1. 研究背景と目的

Jung¹⁾は、「人々は人生の意味ある生き方について、あるいは神や不死について絶対的な信仰を持っているというだけで、大きな違いになる、あるいはなるかもしれないと感じている」と述べており、信仰心とメンタルヘルスの関係は古くから注目されてきた。先行研究では、信仰心や宗教へのコミットメントの強さと、メンタルヘルスとの関連が示唆されている。例えば、Koenig²⁾は、欧米の研究を概観し、宗教への関与の高さがうつ病や自殺、不安を軽減し、ウェルビーイングや楽観主義、希望といった肯定的感情を促進することを明らかにしている。またGartnerら³⁾は、宗教と精神的健康の関連について200件以上の研究をレビューし、宗教への関与が高いほど健康状態がよく、幸福感および結婚満足感が高く、死亡率や自殺、薬物の乱用、飲酒、犯罪、抑うつが低いことを報告している。一方、Ireneら⁴⁾は慢性疾患患者における霊性と宗教の存在意義に着眼し、ガーナの高血圧患者の霊性、宗教と、服薬アドヒアランスとの関連を調査している。結果として、ほとんどの患者は服薬に固執せず、霊性が服薬の非アドヒアランスと関連していたこと、すなわち服薬よりも、神による癒しに頼る可能性があったことを報告している。

一方、日本では、信仰心や宗教と、メンタルヘルスとの関連をテーマとした研究は少ない。その理由の一つとして、多くの日本人は明確な信仰心や宗教を持っていないため、研究対象者を得ること自体が困難であることが推察される。2008年度の統計数理研究所による調査では、「信仰を持っている」と自覚

している日本人は3割であったという⁵⁾。しかしわが国でも、宗教行事へ参加する人は少なくなく、本状況を説明し得る仮説として、阿満⁶⁾による「日本人はあいまいな宗教意識であるが、豊かな宗教性を有している」という言述を適用できよう。さらに西沢⁷⁾と金児⁸⁾は、宗教性を、宗教行動や宗教への態度によって測定し、それらがウェルビーイングや心理的充足感と関連していたことを報告している。以上より、日本人の信仰心や宗教に対する意識は曖昧であるものの、信仰心の存在を100%否定できるわけでもなければ、宗教へのコミットメントや、宗教からの影響も少なくない可能性がうかがわれる。そこで本研究では、日本人の信仰心や、宗教へのコミットメントについて、メンタルヘルスの観点から掌握したいと考える。

今回はその第1ステップとして、青年期における職業選択と信仰心の関連を探索することとした。青年期後期の発達課題は、Erikson⁹⁾が提唱した概念である同一性(identity)を獲得することである。一方でGrotevant¹⁰⁾は、Eriksonの自我同一性の探究を、問題解決行動として捉え、青年後期の青年はいろいろな領域(職業、イデオロギー、価値観、人間環境など)で、自分あるいは自分の環境に関する情報を取捨選択しながら、人生の自己決定を行うと論じている。つまり職業決定は、青年期の重要な発達課題であり、職業選択のあり様とその結果は、青年の心の発達、メンタルヘルスの一指標として見立てることができる。本研究では、信仰心をもつ親の元で育った青年の、心の発達の一指標としての職業選択のあり様とその結果、その背景に潜む心理を明らかにすることで、信仰心や宗教と、メンタルヘルスとの関連を見極めたいと考えた。それはまた、信仰心の世代間連鎖の実際を示唆することにも繋がる。宗教の具体については、日本の中で広まっている世界三大宗派のうちのキリスト教(プロテスタント)を選択した。

2. 研究方法

1) 研究対象者

国内に在住する牧師を親にもつ日本人の成人の子ども(20-30歳代)を対象とした。コミュニケーション障害等がある者は適応外とした。研究対象者候補者の確保は、コンビニエントサンプリングを用いた。

2) 調査方法

学童期から青年期にかけて親の信仰や職業からいかなる影響を受けたか等について、インタビューガイドを用いて半構造化面接を行った。逐語録を作成し、それをデータとして質的帰納的に分析した。今回は、成人した子どもが信者である場合と、ない場合の2群に区分して、信仰の連鎖背景について考察した。

3) 倫理的配慮

研究対象者に口頭及び書面にて研究目的・方法と共に倫理的事項について事前説明し、書面による自由意志による同意を得た。倫理的事項の内訳は、以下の通りとした：①研究において得た個人情報、守秘義務を遵守し、本研究以外では使用しない、②研究成果は、学会および学術雑誌等で発表する、③研究対象者が研究協力を途中辞退した場合は、それまでに得られた研究データを消去し、再現不可能にする、④個人情報保護のために、面接によって得られた情報、音声データから逐語録まですべての取り扱いにおいて、個人名は記号化し、個人を特定できる情報は削除する、⑤データの情報流出を防ぐための情報管理をする、⑥研究終了後、電子データは速やかに削除し、個人情報が記載されている書類は裁断処理する。なお本研究は、Y大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

3. 結果

対象者は20-30歳代の男女計10名であった。信者である群とない群のインタビューデータを世代間連鎖の背景という観点から分析した結果、以下の相違と共通点が見いだせた：①絶対的な存在への確信、②親からのメッセージ、③学童期のエピソード、④社会文化的背景、⑤親に対する尊敬の念、⑤神への期待、⑥信仰に対する肯定的認識と自由度。表1に、各カテゴリについて代表的なコメントを列記した。

4. 考察

1) 信者の特徴

信者の対象者に特徴的だった背景として、神という名の絶対的存在に対する

表 1 親の信仰や職業からの影響と己の職業選択

カテゴリ	代表的なコメント
絶対的な存在への確信	<p>・ (他の人は) 強い意志と言うか、どういう過程で信じるに至ったのか分からないですけど、そのきっかけが私には無かったんですよ。だから、(信仰は自分の) すごい身近にあったけれど、自分は信仰するに至らなかった。</p> <p>・ 神の存在については半々、ずっと聞いてきていたので、子どものころから自分の空想の世界ではあったんです、神様の世界が。</p> <p>・ 神のみぞ知るじゃないですが、そこらへんは信じてみないと分からないところもあったりするんですけど。確実に、教会に通い続けて、信じつづけている人って大なり小なり聖霊体験みたいな、何かしら宗教的な体験をしているんですよ。そういう瞬間が絶対にあるんです。私の場合は子どものころから、(神が) いないことが無かった、信じて疑わなかった。</p>
親からのメッセージ	<p>・ (信仰については) 違和感があったままずっときていたので……。親はどちらも、すごく信仰心を持っているけれど、それを子どもに押し付けることも無く……。逆に、強制されたほうが良かったのかもしれないですね。</p> <p>・ (子どもが言うことを) 考えてくれていない訳ではないんですけど、「お任せ」みたいな感じになってしまうから、ちょっと納得いかないじゃないですけど、ちゃんと相談に乗ってもらえたという感覚がなかった。「これはダメだ、あれはダメだ」はなく、「好きなようにやりなさい」、「どうぞ」みたいな、最終的には「神様が見ているから大丈夫だよ」っていう感じでした。</p> <p>・ (親は) クリスマンになってもらいたいのは、当然なってもらいたいと思っています。もちろんそうだと思いますけど、絶対に(子どもに) 強いてこなかったですね。</p>
学童期のエピソード	<p>・ いまいち馴染めなかったんですよ。外の世界と中の世界で完全に断絶じゃないですけど、別の世界を生きている感じだったのと、別の世界を行き来している感じだったので、それを一体化させてもらっていたら、もしか</p>

	<p>したら自然に（信仰に）入って来ていたのかもしれないです。でもずっと、外は外の世界だった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・牧師の子と、外で言うのは恥ずかしかったんですよ。気にしていたのがあったんだと思います。 ・牧師の子どもとしてちやほやされて、ちやほやでもないですけど、少なくとも他の子どもたちよりかはちやほやされるわけですよ。甘やかされるし、「〇〇先生の子どもか……」と、どこの集まりに行っても何となく顔が知れていたりして、自分が有名人になった気分になったりして。そういうところで、すごい驕りみたいなのところが結構ありましたね。
<p>社会文化的背景</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい頃からずっと礼拝に出ていたので、家を出るまではずっとだったので。でも思春期くらいになると面倒くさいじゃないですけど、それまでは当たり前のようにやっていたと思うんですけど、外とのギャップも結構あって、あまり他に教会出身というか、牧師の子どもがいなく、食事の前にお祈りをしたりとかも……。 ・ほとんど子どもがいなかったんですよ。だから自分の（牧師の）子どもだけです。大人の礼拝には人が来ていたんですけど。 ・聖書を読む中で得ていくものもあるし、実際にそれを運用して生きている大人が教会の中にはいるので、その大人を見て育つというのもあって、常に色々な世代を観察して生きていけたんですね。そういう大人たちが社会の波にさらされつつ、プラス聖書の規範がある中で、どうやって生きているのかを見るんですよ。
<p>親に対する尊敬の念</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・すごいですよね、自分の親ながら。辛いことがあっても信仰で乗り越える、みたいな感じなので。そういう意味では、とことん絶望しないというか…。自分はそこまではないので。 ・信徒だけではなくて、信徒の家族までも抱えていることになるので、信徒が多ければ多いほど（牧師の親は）抱えるものも多いし、更にその中に問題を抱える家族が2-3軒あったら、四六時中電話が掛かってきたりするんです。クリスチャンとして生きていたとしても、あんなふうには出来ない、というところが確実にあります。

	<ul style="list-style-type: none"> ・そこらへん両親を尊敬しているところでもあります。日常的に神がいるという生き方を、神様を中心とした生き方をしていたからこそ、自分もこの考え方になったんだろうなと思うし。
<p>神への期待</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クリスチャンではないけれど、いざというときは必ず「神様！」と心の中で唱えているし、頼っているんだと思います。 ・自分たちにとってはイエスキリストが生活の中心というか、何よりも大切な最優先のこととして生活しているので、うちの家族は。毎日、朝両親とか、うちの教会の方はお祈りの時間をもって始めるんですけど、そのお祈りの時にも「今日一日も御心がありますように」とひたすら祈って一日を始めていくので、やっぱりそういうことを毎日当たり前のように、そのために生きているというか、人生そのものが神様のために生きるということで自分と家族は生きているので。 ・それをまず両親が自然にやっていたから、うちの家族は誰に強制されるでもなく、それぞれそういうふうには信仰が継承されているのかなと思います。
<p>信仰に対する肯定的認識と自由度</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・プロテスタントだからかわからないんですけど、生まれてすぐ洗礼とかはないんです。でも、自分の意志で信仰すると決めたら洗礼をするという形なので。教会に来ていた人達の洗礼を見たことはあるんですけど、自分はそこまで至っていないなという感じで。 ・将来信仰を持つ可能性はあるかもしれない、その時が来たらそういうことになる。今は、信仰じゃない別のものに心の拠り所があるみたいなどころがあるので、そういうものを失ったときを考えると（わからない）、揺らがないので信仰は。 ・毎週日曜日は必ず礼拝に出席していましたね。親から強制されていたとかではなかったですね。うちの兄弟みんな信仰心強いので、それぞれが自分の意志で神様を礼拝するために来ていたという感じですね。自分もそうでした。

確信や靈的体験、親からの、本人が捉えるところの比較的明確なメッセージ、学童期の牧師の子どもゆえの経験（周囲の関心）、地域や住民の教会に対するコミットメント等が見いだされた。絶対的存在に対する確信等については、松島¹¹⁾がキリスト教 A 教団に関わる日本人クリスチャンの「宗教性」発達モデルの中で想定する、キリスト教および教会との関わりのスタートである「現実定義との接触」（「知識」の吸収、「共同体」の形成、「行動」から構成される）の、次の段階である回心体験（救いの体験）まではいかずとも、それに先行する気づき体験を得ていることが示された。

また、牧師である親から信者になることの強制は皆無であっても、親がそれを希望していると、信者の対象者は確信している様子がかがわれ、そのようなメッセージを汲みとっての信仰のスタートである可能性が示唆された。安井¹²⁾は、女子青年の同一性形成に対する影響をキリスト教信仰の有無と、親子関係（女子青年の両親に対する認知）の両面から検証するために一般女子大学生（非宗教群）とクリスチャン（プロテスタントの洗礼を受けている）女子学生（宗教群）を対象に調査し、宗教の有無によって職業的同一性形成における親の影響の仕方に差異があり、また宗教群内において親の信仰形態の相違が結婚領域の同一性形成に影響していたと報告している。また猪瀬¹³⁾は、創価学会での次世代育成を述べる中で、同性の親の信仰態度の強さが現在の信仰態度に影響すること、影響関係で性別特性があることを指摘している。さらに別府¹⁴⁾は、短期大学生の女子を対象とした倫理意識継承の調査の中で、父親母親双方の価値観から均等に影響を受ける事柄が信仰心、勇気、精神力であり、父親特有のそれとして公平、従順、犠牲的精神が見いだされたと報告している。本対象者の牧師の親は全員父親であったが、クリスチャンホームで育ったという意味では、牧師でない信者である母親の信仰の価値観も継承している可能性や、対象者自身の性別の相違が本所見に影響していた可能性も推察される。

最後に、学童期における牧師の子どもゆえの周囲からの関心や、地域や住民の教会に対するコミットメント等、すなわち地域文化が、牧師の子どもが信者になるか否かに大きな影響を及ぼす可能性も示唆された。教会がどれだけコミュニティと共生しているか、すなわちその土地の人口数や教会の信者数、信者の牧師家族の交流や関与のあり様が、牧師の子どもの信仰連鎖を左右する可能

性が示された。特に地方と都心では異なることが推察された。

2) 共通項としての親に対する尊敬の念と、学童期における2つの生活圏

一方、信者であるなしに関わらず共通して見いだせたのは、親に対する尊敬の念や神への期待（「いざというときに神様は助けてくれる」という気持）、信仰に対する肯定的認識と「信仰に対する気持ち」の自由度等であった。現在信者ではなくとも、将来の信仰へのコミットを否定する人はいなかった。牧師の子どもは、親の一生活者としての日常性（父親としての言動）と、聖職者や信徒としての宗教性を帯びた日常性、子どもにとっては、ある意味での非日常性（牧師としての言動）を同時に目にする事から、葛藤を持ちやすいという指摘がある。また、クリスチャンホームの子どもたちの、苦悩に関する報告もあるが、本研究対象者において、牧師の子どもであること、そのこと自体による負の経験が強調されることはなかった。逆に、クリスチャンホームであることのメリットが強調されるケースが少なくなかった。

次に、小学生になって以降生活圏が教会（自宅）を中心とした環境から、クリスチャンがむしろ少ない学校や社会へと広がるにつれて、両世界を行ったり来たり、あるいは両圏を並行して生きてきた様子が示唆された。信者であるなしに関わらず対象者は皆、類似した経験を得ていたが、特に信者でない対象者においてその傾向は強かった。猪瀬¹⁵⁾は、北海道創価学会の調査結果を報告する中で、信仰継承に影響を与える要因として、O'Connorら¹⁶⁾の調査所見を引用し、ミドルクラスの青年の宗教的活動に長期にわたって影響する要因として第1は、その宗教の教えや習慣がその人が育てられた中で支配的な文化であることと紹介している。それが親の信仰態度や教化態度、幼少時に教会に通った経験よりも優先される要因であったことは、本所見とも共通しているといえよう。2つの生活圏イコール、2つの異なる価値観をもつ世界を行き交うことが、学童期や思春期の青年にとって何を意味するのか、その内実を今後さらに探求していくことが重要かもしれない。それをもって、信仰の世代連鎖に関する背景をより詳細に見いだせるのではないと考える。また今回は、対象者をキリスト教のうちプロテスタントの牧師の子どもに限定したが、カトリックや仏教をはじめとした他の宗教では、世代間連鎖の様相も異なる可能性があると考えられる。より広い対象をもって同研究を続けていくことが必須と考える。

文献

- 1) Jung CG (1964): Man and his symbols. London: Aldus books limited. (カール・グスタフ・ユング著, 河合隼雄訳 (1975): 人間と象徴—無意識の世界 上巻, 河出書房新社
- 2) Koenig HG (2008): Medicine, religion and health: Where science and spirituality meet.
- 3) Gartner J, Larson DB, Allen GD. (1991): Religious commitment and mental health: A review of the empirical literature, Journal of psychology and theology, 19 (1), 6-25.
- 4) Kretchy I, Owusu-Daaku F, Danquah S (2013): 霊的宗教的信念は高血圧患者の服薬アドヒアランス行動に対して問題になるか (Spiritual and religious beliefs: do they matter in the medication adherence behaviour of hypertensive patients ?), Biopsychosocial medicine, 1-7.
- 5) 林文 (2010): 現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心—日本人の国關婦周査と国際比較調査から—, 総計数理, 58(1), 39-59.
- 6) 阿満利麿 (1996): 日本人はなぜ無宗教なのか, ちくま新書.
- 7) 西沢悟 (1998): 宗教心理と精神健康—現代大学生について, 北海学園大学学園論集, 96, 1-65.
- 8) 金児暁嗣 (1998): 宗教と心理的充足感 濱口恵俊 (編): 『世界のなかの日本型システム』, 新曜社, 301-329.
- 9) Erikson EH (1959) / 小此木啓吾訳編 (1973): 自我同一性 アイデンティティとライフサイクル, 人間科学叢書.
- 10) Grotevant HD (1987): Toward a process model of identity formation, Journal of adolescent research, 2(3), 203-222.
- 11) 松島公望 (2011): 宗教性の発達心理学, 株式会社ナカニシヤ出版, 25-53.
- 12) 安井あゆみ (2001): キリスト教が女子青年の自我同一性に与える影響 (2) —親子関係を中心として—, 日本青年心理学会大会発表論文集 (9), 53-54.
- 13) 猪瀬優理 (2011): 信仰はどのように継承されるか—創価学会にみる次世代育成, 北海道大学出版会.
- 14) 別府庸子 (1996): 倫理意識の継承と推移, 電子情報通信学会技術研究報告, 96: 202, 25-30.
- 15) 猪瀬優理 (2004): 信仰継承に影響を与える要因—北海道創価学会の調査票調査から—, 現代社会学研究, 17, 21-38.
- 16) O'connor TP, Hoge DR, Alexander E (2002): The Relative influence of youth and adult experiences on personal spirituality and church involvement, Journal for the scientific study of religion, 41(4), 723-732.